

4:1 主人たちよ。あなたがたは、自分たちの主も天におられることを知っているのですから、奴隷に対して正義と公平を示しなさい。 4:2 目をさまして、感謝をもって、たゆみなく祈りなさい。 4:3 同時に、私たちのためにも、神がみことばのために門を開いてくださって、私たちがキリストの奥義を語れるように、祈ってください。この奥義のために、私は牢に入れられています。 4:4 また、私がこの奥義を、当然語るべき語り方で、はっきり語れるように、祈ってください。 4:5 外部の人に対して賢明にふるまい、機会を十分に生かして用いなさい。 4:6 あなたがたのことばが、いつも親切で、塩味のきいたものであるようにしなさい。そうすれば、ひとりひとりに対する答え方がわかります。 4:7 私の様子については、主にあって愛する兄弟、忠実な奉仕者、同労のしもべであるテキコが、あなたがたに一部始終を知らせるでしょう。 4:8 私がテキコをあなたがたのもとに送るのは、あなたがたが私たちの様子を知り、彼によって心に励ましを受けるためにほかなりません。 4:9 また彼は、あなたがたの仲間のひとりで、忠実な愛する兄弟オネシモといっしょに行きます。このふたりが、こちらの様子をみな知らせてくれるでしょう。 4:10 私といっしょに囚人となっているアリストアルコが、あなたがたによろしくと言っています。バルナバのいとこであるマルコも同じです——この人については、もし彼があなたがたのところに行ったなら、歓迎するようにという指示をあなたがたは受けています。—— 4:11 ユストと呼ばれるイエスもよろしくと言っています。割礼を受けた人では、この人たちだけが、神の国のために働く私の同労者です。また、彼らは私を激励する者となってくれました。 4:12 あなたがたの仲間のひとり、キリスト・イエスのしもべエパfrasが、あなたがたによろしくと言っています。彼はいつも、あなたがたが完全な人となり、また神のすべてのみこころを十分に確信して立つことができるよう、あなたがたのために祈りに励んでいます。 4:13 私はあかしします。彼はあなたがたのために、またラオデキヤとヒエラポリスにいる人々のために、非常に苦勞しています。 4:14 愛する医者ルカ、それにデマスが、あなたがたによろしくと言っています。 4:15 どうか、ラオデキヤの兄弟たちに、またヌンパとその家にある教会に、よろしく言ってください。 4:16 この手紙があなたがたのところで読まれたなら、ラオデキヤ人の教会でも読まれるようにしてください。あなたがたのほうも、ラオデキヤから回って来る手紙を読んでください。 4:17 アルキポに、「主にあって受けた務めを、注意してよく果たすように」と言ってください。 4:18 パウロが自筆であいさつを送ります。私が牢につながれていることを覚えていてください。どうか、恵みがあなたがたとともにありますように。

## 導入

私が英国にいた 8 月の 3 週間の間、メッセージを取り次いでくれた説教者の方々に、コロサイ人への手紙を一章ずつ教えてくださるよう依頼しました。

その間、来ていなかった人たちのために、この書のあらすじと、3 名の説教者がこれまで教えてくださったことを手短にお話しましょう。

コロサイ人への手紙を一言で表すなら、イエス・キリストについて新たな発見をさせてくれる書です。

主題は、イエスが私たちのすべての必要を満たしてくださる救い主であるということです。

パウロは、この手紙を書いた当時、ローマで獄中生活を送っていました。

パウロの働きによって改宗したエパfrasが、パウロを訪ねて、コロサイの教会の問題について報告しました。

エパfrasはコロサイの教会の創設者で、教会に入り込んできた新たな偽りの教えについてパウロに話しました。

この偽りの教えは、今日では一般的に「グノーシス主義」と呼ばれます。

これは、「知る」という意味のギリシャ語の単語「グノーシス」が語源です。

「グノーシス主義者」は、自分たちが霊的な事柄について優れた知識を持っていると主張しました。

その教えは、キリスト教の真理、ユダヤ教の律法、ギリシャの哲学、東洋の神秘思想などを融合させたものでした。

その思想体系は、他の人々が持ち合わせない特別な「悟り」を信徒が得るというものでした。グノーシス主義者は、「満ち満ちた」という単語をよく使いました。パウロがこの手紙で同じ単語を使っているのはそういうわけです。

グノーシス主義の教えは、「律法的慣習」を要求しました。(2:16)

また、肉を厳しく律することを奨励しました。これは一般的に禁欲主義と呼ばれます。(2:18-23)

「すぎるな。味わうな。さわるな」は彼らの真言です。

また、特定の日を「聖なる日」としたり、特定の食べ物を「罪のある食べ物」としたりしました。グノーシス主義の教えは、霊的に見えるかもしれませんが、霊的な価値はまったくありません。福音に不要なものを追加し、イエスや聖書の真理の教えからクリスチャンを遠ざけるものだからです。

これは、人が作りあげた宗教で、肉の思いに訴えかけるものです。

信徒の心やたましいにとって無益です。

パウロがこの手紙を書いたのは、「必要なのはイエス・キリストだけである」と宣言してイエス・キリストに立ち返るよう、信徒たちに呼びかけるためです。

パウロがコロサイの信徒たちに望んだのは、イエスがすべてを備えてくださると信じ、それに頼って生きることによって、霊的に成熟することでした。

信徒たちのすべての必要を満たすのに必要なのは、イエスだけです。

他に何も要りません。

パウロは1章で、信仰生活の中心に「福音」を置く必要性を強調します。

パウロは、どのように救われたか振り返り、救われている証拠を見直すようにと信徒たちに呼びかけます。(1:1-12)

また、イエス・キリストの十字架とイエスがくださったすべての御業に目を留めるようにと語りました。

パウロは信徒たちに、イエスがこの世を造り、教会を建て上げ、パウロの働きを導いているお方だと言いました。

2章では、パウロはグノーシス主義の教えについて信徒たちに警告します。

そして、信徒たちがキリストにあって歩み、成長するようにと語ります。(2:6-7)

信徒たちは、すべてにおいてイエス・キリストを第一にし、イエスの満ち満ちたご性質に頼るようにと教えられます。(2:8-10)

3章では、パウロはひとりひとりがきよくあることについて言及します。

具体的に、クリスチャン同士の交わりの中や、家庭や職場の日常でひとりひとりがきよくあるように勧めました。

では4章の学びに入ります。

4章は、3章でパウロが教えたことの続きです。

### **1. 奴隷の主人たちへの呼びかけ (4:1)**

新約聖書で奴隷について記されている場合、19世紀のアメリカで存在した奴隷制度とは異なるものであると知っておく必要があります。

新約聖書の時代の奴隷は、実はなかなかよい職業でした。

実際、解放される機会があっても、奴隷でいつづけることを選ぶことがよくありました。そのほうが経済的に恵まれるからです。

当時の奴隷制には、ただひとつの問題がありました。

それは、奴隷の所有者の問題でした。

その地域の法律では、奴隷が軽犯罪を犯した場合に、奴隷の所有者がその奴隷を殴ったり殺したりすることが許されていました。

つまり、奴隷の所有者が良くない人であれば、その権力を悪用して、奴隷を虐待できることになります。

そこでパウロは、コロサイの教会で奴隷を所有している人々に、奴隷を正當に扱うようにと呼びかけました。

そして、この個所で、奴隷の所有者たちも自らの行いについて神に申し開きしなくてはならないと教えます。

パウロは、人をどう扱うかは大切な問題だと教えました。

私たちは奴隷を所有していませんが、目上の立場にあるなら、すべての人に敬意と誠意をもって接するよう気をつけなくてはなりません。

神が喜ばれない方法でクリスチャンを扱う正當な理由は絶対にありません。

過去 30 年間で、クリスチャンが他のクリスチャンや牧師に対してひどい仕打ちをしたことを知って何度も驚いたことがあります。

私は牧師として、そういったひどい仕打ちを受けたこともあります。そのような経験から教えられたことは、神の喜ばれないひどい仕打ちをした人たちに対して、神はすぐでなくても後に厳しい裁きを下されるということです。

そこで私は、どんな人や状況にも細心の注意を払って接するよう心がけてきました。聖書の教えに明らかに反する行為について誰かを戒めなければならない場合でもそうです。

クリスチャンの信徒はイエスにとって大切な存在です。イエスはその人たちのために死なれたのですから。

ですから、その人たちは、職業や社会的立場に関わらず、私たちにとっても大切なのです。

## 2. クリスチャンとしての証に関する呼びかけ。(4:2-6)

ここにはおもに 3 つの呼びかけが記されています。

### a) 目を覚まして祈る。

聖書の訳によって、目を覚ますことと祈ることに対する強調のしかたが多少違います。

新改訳には、「目をさまして、感謝をもって、たゆみなく祈りなさい。」とあります。

新共同訳には、「目を覚まして感謝を込め、ひたすら祈りなさい。」とあります。

口語訳には、「目をさまして、感謝のうちに祈り、ひたすら祈り続けなさい。」とあります。

ここで呼びかけられているのは、祈りのライフスタイルです。

パウロは、祈りが浸透した生き方を推奨しています。

日本の夏はむし暑いです。

日本の夏は湿度が高く、汗まみれになります。パウロは私たちが祈りにまみれることを望んでいます。

もちろん、祈りにまみれるほうが、日本の夏で汗まみれになるよりも、はるかによい経験です。

「目を覚まして」と訳された個所は、英語の訳では「油断せず」とか「用心して」という意味の単語が使われているものもあります。

この考え方は、ネヘミヤ 4:9 に登場します。当時、エルサレムの城壁の再建工事にあたるユダヤ人を敵が脅していました。

ネヘミヤ 4:9 しかし私たちは、私たちの神に祈り、彼らに備えて日夜見張りを置いた。

イエス・キリストも、マルコ 14:38 で、目を覚まして祈るように教えておられます。

マルコ 14:38 誘惑に陥らないように、目をさまして、祈り続けなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。」

イエスは、なぜそうするべきなのか理由も教えてください。「心は燃えていても、肉体は弱い」からです。

私たちは常に警戒しながら祈っていなければ、誘惑に勝つことはできません。

私たちが目を覚まして祈るのは、自らをきよく保つためだけではありません。福音のメッセージを分かち合う機会を求めて、目を覚まして祈らなければなりません。パウロがピリピで投獄されていた当時のことを考えてください。パウロは、看守のために祈り、機会を求めて目を見張っていました。看守が剣に手をかけて自殺しようとしたとき、パウロは叫んでそれを止めました。パウロが看守のために祈りつつ、見張っていたことを神に感謝します。私たちは機会が与えられるように祈りますが、その機会が実際に与えられたら、ちゃんと行動しなければなりません。

#### **b) 賢明にふるまう。**

5 節には、外部の人に対して「賢明に」ふるまうようにとあります。そして、6 節にその方法が記されています。

では、この呼びかけについて考えてみましょう。

まず、「外部の人」が誰かを知る必要があります。

それは、イエス・キリストのいない人生を送っている人たちです。

イエス・キリストのいない人生とは、とても悲しいものです。

それは、希望も平安も赦しもないことを意味します。

そのような人たちと交流するときは、「賢明に」ふるまわなければなりません。

私たちがそうしてほしいかどうかに関わらず、その人たちは私たちの生き方を見ています。何か批判すべきところはないか探しています。

テサロニケ第一 4 : 12 は、「外の人々に対してもりっぱにふるまうことができ、また乏しいことがないようにするためです。」と語ります。

ノンクリスチャンと接するとき、正直でいなければなりません。

私たちの生き方を批判される機会を与えないためです。

支払いの期限を守り、公正な仕事をし、他の人の陰口を言わないようにしましょう。

私たちが悪口を言う対象の人と、それを私たちから聞いた人が親せきだったり何らかの関係がある人かもしれません。

6 節には、私たちの言葉が常に塩味のきいたものであるようにと語ります。

私たちの言葉を味つけるものは、きよさという「塩」でなければなりません。

旧約時代、ユダヤ人は塩をいけにえに使いました。

それは、きよさの象徴であり、すべての良いものを保つことの象徴でした。

ギリシャ語で「塩」は、「カリタス」です。この単語は「恵み」という意味です。

塩は風味を与えるので、この単語が使われました。

エペソ 4 : 29 には、私たちの言葉が悪いものであってはいけなないとあります。

悪いものを出さないでいられるのは、神の恵みによります。

浅はかな批判、動機を疑われるような発言、怒りにまかせた言葉は、イエス・キリストの証を台無しにしてしまいます。

もちろん、私たちは完璧ではないので、失敗もあります。けれども、キリストを信じる信仰を持たない外部の人たちに恵みの証ができるよう、つねに努めなければなりません。

トランプ大統領をこき下ろしたり、その方針などを批判したりすることも間違っています。

安倍首相が好きでなくても、おおっぴらに批判する権利は私たちにはありません。

### **3. クリスチャンの働き人への呼びかけ。(7-18 節)**

パウロは、支援者たちの支えなしに働きをすることはできなかったでしょう。

ひとりで働きをできるクリスチャンの働き人はいません。私たちは皆、神とともに働く同僚です。

コリント第一 3:9 私たちは神の協力者であり、あなたがたは神の畑、神の建物です。

7-18 節で、パウロは働きを助けてくれる人たちの名を挙げて感謝しています。その人たちは、パウロにとってとても大切な人たちでした。それで、感謝していることを本人に知らせたいと願ったのです。

- a) テキコ — パウロは、テキコのことを愛する兄弟、忠実な奉仕者、同労のしもべと書いています。そのテキコをコロサイの教会に送りました。それは、彼らの状況をよく理解し、励ますためでした。  
この人は、私たちが聖書の一部として読んでいる手紙を届ける役目を任されました。パウロはテキコと3年ほどいっしょに働きました。パウロの宣教旅行中、テキコがいっしょにギリシャにいたことが記されています。(使徒 20:4)  
クリスチャンの働きで誰にも頼らないでいると、自分の働きを誇るようになっていたり、判断を大きく間違ったりする危険性があります。  
一方、チームとして助け合いながら働くなら、謙虚になり、結果、神の祝福が得られます。  
パウロはともに働く人々がいることを喜んで認めました。どんな働きをしているにせよ、私たちがもそうあるべきです。  
私も、ここ OIC での私の働きを支えてくださるすべての人を感謝しています。  
OIC は、私個人の働きではありません。私たち皆の働きであり、私たちは皆、イエスに仕えてともに働いているのです。  
私たちがともに働くなら、OIC で行われることはイエスの働きです。  
皆さんが私を支えてくださるとき、それは、OIC におけるイエスの働きに参加して仕えていることになります。  
私たちはいっしょにイエスに仕えています。皆さんはひとりひとりとても大切な存在です。
- b) オネシモ — 彼もまた、忠実な愛する兄弟と記されています。  
聖書をよく読んでいけば、オネシモに忠実な兄弟でなかった過去があることがわかるでしょう。  
彼は昔、奴隷で、主人のお金を盗んで逃げたことがありました。  
パウロは投獄中にオネシモに出会い、イエス・キリストへと導きました。  
オネシモは完全に変えられ、新しい人になりました。  
お金ではなく、イエス・キリストのとりこになったのです。  
ピレモンを読むと、パウロがオネシモの主人だったピレモンに手紙を書いていることがわかります。  
パウロは、オネシモが家からお金を盗んだ罪を赦してあげてほしいとピレモンに願います。  
神はオネシモの罪を赦してくださいました。それは、イエス・キリストがその罪の罰を受けてくださったからです。  
けれども、ピレモンにとってオネシモを赦すのはそう簡単ではありませんでした。  
赦すには、恵みと謙虚さが必要でした。  
私たちが同じです。私たちに悪いことをした人たちを赦すのは簡単ではありません。  
イエスはマタイ 6:14-15 で、人を赦すことの大切さを語られました。私たちが他の人を赦さないなら、神も私たちを赦されないと教えておられます。

#### マタイ 6:14-15

6:14 もし人の罪を赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してくださいます。  
6:15 しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません。

これは、イエスが弟子たちに祈り方を教えられた直後の言葉です。

これは、イエスが主の祈りの中で強調されたことです。

イエスによって私たち自身が赦されたことを理解して初めて、私たちは本当に人を赦すことができます。

今日ここにいる人には、誰に対しても赦せない心を持っていないことを願います。

もし、赦せないという思いがあるなら、どうか恵みによってその人を赦してくださいと願います。

もしその人を赦さなければ、本来あるべきクリスチャンとしての人生を歩めなくなるからです。本来あるべきクリスチャンとしての人生とは、神に祝され、喜びに満ちた人生です。

- c) **アリスタルコ** — この人は、パウロといっしょに囚人となっていると記されています。使徒 19 : 29 から、彼がエペソの暴動事件のときに捕えられたことがわかります。当時、アリスタルコはパウロの旅に同行していました。そして、宣教旅行でパウロとともにギリシャにも行きました。（使徒 20 : 4）また、使徒 27 章に記された嵐でパウロが難破したときにも一緒にいました。（使徒 27 : 2 に彼の名が記されています。）アリスタルコはパウロのそばにいて、宣教の働きがたいへんな時も彼を支えました。クリスチャンの働き人が苦境に立たされた時に支えるには、成熟した霊性と知恵と神の恵みが必要です。働き人がたいへんな状況のときに、多くの方は支援をやめてしまいます。私たち夫婦は、32年間ずっと私たちのために祈って支援してくれた人たちのことを心から感謝しています。私たちは、暴動に巻き込まれたり、投獄されたり、海で難破したりはしていませんが、つらい目にあったことはあります。そのようなたいへんな時にこそ、支えてくれる人たちのありがたみを実感します。私たちがあきらめずにいられたのは、神とそのしもべが私たちのことをあきらめずにいてくれたからです。困難なときに必要なのは、拒絶ではなく支えです。牧師、宣教師、宣教の働きに関わるスタッフといった人たちは、アリスタルコのように働きを支えてくれる人を必要としています。皆さんがそのひとりであることを願います。

- d) **マルコ** — パウロと一緒に働きを担う人としてふさわしくないと、マルコを退けたことがあります。マルコはキプロスまで同行しましたが、その後パウロのもとを離れました。（使徒 13 : 13）また、使徒 15 : 36-41 には、意見が分かれた話について記されています。

#### **使徒 15 : 36-41**

15:36 幾日かたって後、パウロはバルナバにこう言った。「先に主のことばを伝えたすべての町々の兄弟たちのところに、またたずねて行って、どうしているか見て来ようではありませんか。」 15:37 ところが、バルナバは、マルコとも呼ばれるヨハネもいっしょに連れて行くつもりであった。 15:38 しかしパウロは、パンフリヤで一行から離れてしまい、仕事のために同行しなかったような者はいっしょに連れて行かないほうがよいと考えた。 15:39 そして激しい反目となり、その結果、互いに別行動をとることになって、バルナバはマルコを連れて、船でキプロスに渡って行った。 15:40 パウロはシラスを選び、兄弟たちから主の恵みにゆだねられて出発した。 15:41 そして、シリアおよびキリキヤを通り、諸教会を力づけた。

バルナバはマルコを信頼しましたが、パウロはしていませんでした。

テモテ第二 4 : 11 から、パウロがマルコに対する考えを改めたことがわかります。マルコはパウロの働きに役立つ人となっていました。

テモテ第二 4:11 ルカだけは私とともにおります。マルコを伴って、いっしょに来てください。彼は私の務めのために役に立つからです。

パウロとマルコの状況からとても大切なことを学ぶことができます。

次のように語った人がいました。

「クリスチャンの働きに失敗はない。ふさわしくないところに人が配置されているか、ふさわしいところであっても間違ったタイミングで人が配置されたかのどちらかだ。」イエスがクリスチャンの働きへと人を召されるのは、成功させるためではありません。成長と恵みとしもべの人生という旅路を踏み出させるために召されるのです。

イエスのしもべとして成熟した後にできることを、クリスチャンになったばかりのときにはできません。

マルコもパウロも、一丸となって働くのに必要な恵みと謙虚さがまだ備わっていませんでした。

けれども後になって、神が彼らの心を変えてくださり、ともに働くことができるようになりました。

神は常に、私たちが働きに対処できるようになった時点で、次の段階へ導こうとします。

ですから、物事がうまくいかないときは、ふさわしくないところにいるか、ふさわしいところであっても、人生におけるタイミングが違うのかもしれませんが。

私たちは皆、発展途上にある者だと認識しておかなければなりません。きよめの働きは、天国に行くまで完成しません。

- e) ユストと呼ばれるイエス — この人については詳しいことはわかりません。彼のヘブル語名がヨシユアだったことはわかっています。それは、ギリシャ語で「イエス」と訳されていました。

「ユスト」という名は、「律法を守る人」という意味でした。

彼は、パウロにとって慰めと励ましをもたらす存在でした。

この個所以外では、新約聖書にユストという名前は 2 度だけ登場します。

ひとつめは使徒 1 : 23 で、その人の名字がユストでした。

彼は、ユダの代わりに 12 弟子として選ばれたふたりのひとりでした。このユストは、バプテスマのヨハネによる洗礼から復活までイエスの人生を直接目撃した人です。

もうひとつの個所は、使徒 17 : 7 です。これはコリントでした。

パウロは一時期、このユストの家に滞在していました。彼の家はユダヤ教の会堂の隣でした。パウロは、この家に一年半滞在したようです。（使徒 18 : 11）

コロサイ 4 章 11 節でパウロが名を挙げたユストはおそらくこの人物でしょう。

誰かを一年半も家に泊まらせるのは大きな責任です。

パウロはその期間にユストをよく知ることになったはずです。

そして、ユストもパウロのことをよく知ることになったでしょう。

誰かを家にお客として迎えると、その人の考え方や行動、ふるまいなどがわかるようになります。

パウロの生き方にユストは感心したに違いありません。パウロはユストと気があったのでしょう。

なかなか大きな課題ですが、私たちも神のしもべに対して家庭を開き、もてなしたいものです。そうすることで、その人たちを祝福するためです。また、その人たちが私たちに祝福をもたらすためでもあります。

ヘブル 13 : 1-2

13:1 兄弟愛をいつも持っていなさい。 13:2 旅人をもてなすことを忘れてはいけません。こうして、ある人々は御使いたちを、それとは知らずにもてなしました。

他の人たち全員について学ぶ時間はありませんが、ここで名前だけでも挙げておきましょう。

エパfrasは、コロサイの人たちのために熱心に祈っていました。

ルカは医者でしたから、パウロの健康面でのニーズに応えていたでしょう。

最後にパウロは、デマスとヌンパの名を挙げています。

そして、パウロは信徒たちに、自分のために祈ってほしいとお願いします。

### まとめ

チームの一員となり、クリスチャンの働きに関わる人たちを支えることは、とても大切に価値のある働きです。

私たちが支える人たちもイエスも、私たちが支えていることをちゃんとわかっています。また、その働きはイエスの働きです。そのことを覚えて、これからも支える励みとしましょう。